

# 「秋」の講座が始まりました！



『うら打ち入門講座』  
各自が持ち寄った、  
書や画にうら打ちする  
技術を学びました。



『大人のための絵本づくり』  
物語の創作から製本まで、  
世界に一つしかない絵本づく  
りに取り組みます。



『現代詩入門講座』  
「詩とは何か」「詩の歴史」  
「詩の技法」等、詩を作る  
ポイントを学びます。



『文学講座（後期）』  
伊勢物語の後半、69  
段から終わりまでを読み  
進めます。

## 文芸館主催『講演会』終わる！



「自分史を書こう『私と自分史』」  
をテーマに、たかはたけいこ氏による講演会が8月31日に行われました。

自分史を書くときのポイントを、  
文章の書き方を交えながら楽しくお話いただきました。  
参加者からの質問にも丁寧に応えていただき、有意義な  
時間になりました。

## 文芸館の四季

文芸館を囲む木立の中に、たくさんの台湾リスがいることを前回のこのコーナーで紹介しました。

今回は、珍しい鳥について紹介します。7月末頃から時々目にしていたのですが、先日文芸館の入口に姿を見せてくれました。窓ガラス越しの写真で、ハッキリしないのが残念ですが、体長30～35センチくらいの首の長い鳥です。野鳥事典で調べたところ、サギの仲間の「ヨシゴイ」という鳥の雌に似ていました。ヨシ原や湖沼、湿原に住むことが多く、日本には夏に繁殖のために飛来するとありました。

茶室「松韻亭」前の池や、浜松城公園内のどこかでこの鳥の姿が見られるかもしれません。



<ヨシゴイ・・・でしょうか？>

### 井上靖と浜松 4

#### まじめに勉強した浜松中学時代

靖が級長になった1年1組の担任は、地理担当の山崎瀧三だった。千葉県出身の30歳、野球部長も兼ねていた。元気のよい、剛毅な教師だったようである。

入学早々、「睨まれると、体が縮まってゆくような気がした」厳格な体操教師花井楊五郎に驚かされた靖だったが、それ以上に度肝を抜かれる場面に出くわした。竹刀を持った上級生の一団が、突然靖の教室に現れ、大声でがなり立てながら机を叩いて回ったのである。これが浜中伝統の新入生歓迎だという。伊豆ののんびりゆったりした環境で育ってきた靖には、驚かされることばかりの毎日だった。

二年次に転校した沼津中学校の友人増田潔は、靖と逆に三年次から浜松中学に転校することになった。靖に浜松中学の様子を聞くと、「冬の体操の時間にプールで寒中水泳をさせる」をはじめ、浜中が如何に乱暴な中学であるかということ話を話して聞かせたという。おそらく花井先生の数々のエピソードや、乱暴極まる新入生歓迎の話も出たに違いない。この話に驚いた増田は、転校の中止を一時真剣に考えたが、入ってみるとホラだということがわかったと、「文芸静岡」に載せた『「夏草冬涛」の悪童たち』に書いている。

家庭では3月1日、下の妹波満子が生まれたが、父の隼雄が歩兵第二九旅団と共に満州（現中国東北部）へ出征することが決まった。父は入学発表の少し前の3月24日、大阪港から出発していった。留守宅は、母やふと小5の妹静子、小学校へ入学したばかりの弟達、生まれて間もない波満子の五人家族だった。靖は長男として、母を支え妹弟を援けなければならなかった。これは靖にとって、生まれて初めての経験であった。「孤猿」の中に次のような文章がある。

友達を作る時日もなかったし、勿論教師と親しくなる余裕もなかった。

私はいつも一人で、英語の単語のカードを洋服のポケットから出したり入れたりしながら、毎朝のように市の南の端れにあった自家から、反対の端れにある中学校へと公園になっている丘陵を越えては通ったものであった。私は級で一番体が小さく、性格も晩生（おく）であったので、中学にしんがくしたということだけで精いっぱい、通学するという事それ自体に全精力を費い果たしていたようである。

私が僅かに覚えていることと言えば、その登校の道に蓮池があつて、花の季節が来ると白い蓮の花が開いたことと、坂の途中にいつも黒い大きな野犬がうろついていたことぐらいである。私はその野犬の姿を遠くに見ると廻り道を承知で丘の上の裾野の細い道を選んだものであった。

浜松中学時代の靖は、どのクラブ活動にも参加せず、まじめに勉強に取り組んでいたようである。一番の成績で入った手前、上位の成績を保つためには勉強をさぼるわけにはいかなかったのであろう。一年次靖が受けた授業は、修身（週1時間）、国語・漢文（8）、外国語（6）、歴史地理（3）、数学（4）、博物（2）、図画（1）、体操武道（3）であった。成績は優秀であった。特に作文の時間は、15分くらいで書き上げ教室を出て行ったので、教師や生徒から一目置かれたという。